



SGI提言にみる 「誓いの共有」こそ 前進への一歩を 踏み出す鍵

高名な宗教人類学者であり、行動する宗教者としても知られる山形孝夫氏。
震災後一年を経て、これからの東北復興に求められる
宗教者の役割について話を聞いた。

「単一帰属性」からの 解放 SGI会長の 平和思想に共鳴

三十回目となった「SGIの日 記念提言」を読ませていただきました。生命尊厳の思想を高らかに掲げ、世界一級の知性との語らいを広げてこられた池田大作SGI会長の平和提言に、あらためて瞳みさせられる思いです。

提言の冒頭でSGI会長は、経済学者アマルティア・センの「人間の安全保障」という概念に触れられ、人類の生存・生活・尊厳に深刻なダメージをもたらした突然の災害について言及されました。これについて、思想の混乱と民衆の幸福について思索した「立正安国論」に言及され、そこから進んで三つの現代的視座を引き出しておられました。

第一は「国」という字に「民」の字

を用いた日蓮の極めて独創的な世界観です。国家のための人間から人間のための国家へ向かう、国家観の転換を訴えておられる。第二には「四表の静謐」について、国際協調と紛争や戦争防止の忍耐強い努力を訴えられている。そして第三に「憂いの共有」から「誓いの共有」へと前進するための挑戦を訴えられています。

この第三の憂いを共有するということは、苦しみを共有するということであるという指摘に心打たれました。仏教的な価値観でいえば「慈悲」にあたるのでしょうか。民衆の苦しみと向き合い、共に悩みながら、苦悩を出発点にして共に希望の明日へ向かって行動を開始していく「誓いの共有」です。

「誓い」は「苦しみ」の共有から引き出されてくる。そこにこそ人間蘇生の鍵が秘められているという指摘は重要です。今の日本社会が気づいていない極めて重要な宗教的メッセージではないでしょうか。

全体をとおして、SGI会長の平和思想には宗教的普遍性を感じます。宗教本来の役割である民族性とか国民性といった「単一帰属性」からの解放を感じるのです。SGI会長が紹介されたアマルティア・センがまさしくそうですが、彼は近著『アイデンティティと暴力』（大門毅監訳、勁草書房）の中で、単一帰属のアイデンティティの幻想を打ち破ること、その暴力を打ち破ることに述べています。人間を欲望の機械か、利己心のかたまりのような存在とみる単一帰属の幻想は、やがて暴力へと結びつくのだ、と。

人間は誰しもアイデンティティをもっています。しかし、主体性が排他主義につながってはいけません。家庭や社会や国家への帰属意識が他者への排他的な意識に結びついてはならないのです。いわゆる「宗教原理主義」は排他主義からテロや暴力へと走る。本来すべての宗教は人間を単一帰属性から解放する力をもっています。他

者を認める寛容性を持ち、民族言語・階級といった枠組みを乗り越え連帯していく力を内部にもっているのです。それが間違った指導者のもとで国家権力と結びつき、閉鎖的な教団中心主義を形成してしまう。ゆえに単一帰属の国家観の転換こそが民衆の幸福に直結している。SGI会長の慧眼と勇気ある提言に敬意を表します。

「慰霊」「防災」「憩い」の 復興記念公園を

今、宗教者にはどのような役割が求められているのでしょうか。死者への追悼でしょうか。

私は死者への思い出に浸ることが追悼ではないと思っています。死者の志を継承し、死者の悲しみを受け継ぎ「死者と共に」新しい価値を創造していくことに、真実の追悼があるのだと信じています。「死者を記憶する」とはどのような

新たな共同体の構築にあたり、声を大にして主張したいことがあります。いわゆる「震災がれき」の問題です。

「がれき」という言葉自体が問題だと思えます。世間ががれきと称するものはかつて何であつたのか。それは被災者の生まれ育つた故郷の形です。がれきは、いわば共同体の「失われた形」なのです。しかもおびただしい数の記憶が眠ついている。それは、がれきではなく「墓碑」と呼ぶべきなのです。それを「がれきの処理」という。がれきには引き受け手がなく、がれきの受け入れに応じた自治体の首長には市民

宗教人類学者

山形孝夫

takao yamagata

やまがた・たかお

1932年、仙台市生まれ。東北大学文学部宗教学・宗教史学科卒。同大学院博士課程満期退学。専攻は宗教人類学。宮城学院女子大学元学長、名誉教授。著書に『レバノンの白い山』（未来社）、『死者と聖者のラスト・サパー』（朝日新聞社）他がある。

から抗議電話が殺到する始末です。言葉では被災地の人道支援を口にしながら、いわば集団エゴイズムの形で被災者を二重に傷つけているのです。

私はできるならがれき自体をコンクリートで固めて巨大な「高台」を造ればよいと考えています。被災地のがれきを全部集めて高台を造り公園にする。防災と、慰霊と、地域の憩いを兼ね備える「復興記念公園」を造ればよいと思つています。宮城県の仙台平野には津波が押し寄せた際に避難する高台がありません。

現在自治体では七メートル三十センチの防潮堤を建設する計画があがっています。これは最悪のプランです。まず海が見えない。三陸海岸は世界遺産の候補になるほどの美観を謳われる美しい海岸です。環境資源を損なつては東北復興に大いに支障をきたします。しかも七メートルの防潮堤では、津波を必ず防げるという確証がない。岩手県では十メートルから二十メー

トルを超える津波が押し寄せてきた事実がある。さらに、高い防潮堤があるがゆえに安心しきつて避難することなく津波にのみ込まれてしまった町がある。だからこそ私は復興記念公園を実現したいと思つています。幸い、熱心に応援してくださる議員さんもいます。何とか成し遂げたいと思つています。

民衆の苦悩の「共有」から生まれてきた創価学会に期待

歴史をひもとくと、キリスト教も国家権力と一体化したときに墮落しました。国家権力と結びつくことによつて、宗教本来の使命を見失つたのです。国家神道もそうですし、イスラームもそうです。仏教も檀家制度によつて葬式仏教化したといえるでしょう。国家権力に依存することによつて、宗教の使命を大きく見失つてしまうので

す。その意味で「友情」とか「師弟」という人間の関係性を土台とした「個」によつて立ち、民衆の悲しみのなかから、それと連携する仕方て立ち上がつてきた創価学会の皆さんを私は信頼します。

信仰の本義は一人の信仰者が現実には葛藤しながら、それでも悩める人々を救つていく「振る舞い」にこそあると思うからです。キリスト教も出発点は同じです。草創期、イエスの教えをヘレニズムの世界へ伝えた使徒パウロは語りました。「キリストと結ばれた以上、もはやギリシヤ人もユダヤ人もローマ人もなく、男も女もない、と。それがキリストを信じることだ」と。

最後に、これからもSGI会長の平和思想に共鳴する人々、なかなか、被災地の人々と「誓いの共有」を広げ東北復興を大きくリードしていつてもらいたいと念願しています。(談)



「人生史の断絶」に直面して

池田先生のSGI提言は、「聖教新聞」に二回にわたつて掲載されました。すぐに拝見いたしました。が、とくに前半部分の(へ上)のほうに強く感銘を受けました。

まず目に飛び込んできたのは、東日本大震災の被害に対し、「人生史の断絶」と表現されていることです。私も震災の直後から被災地には何度も足を運びましたが、沿岸部の津波の惨状は、まさに「人生史の断絶」そのものでした。

「家は、単なる居住のための器ではなく、家族の歴史が刻まれ、日々の生活の息づかいが染み込んでいく場所です。そこには、家族の過去と現在と未来をつなぐ特別な時間が流れており、その喪失は人生史の時間を断たれることに等しい」まさに池田先生のおっしゃるとおりです。巨大災害は人生史の断絶をもた

らす。東日本大震災は、二万人以上の人生史の断絶をもたらしました。その哀しみを背負いながら、それでも人は生き続ける。それが自然との究極の共存の在り方なのかもしれません。しかし同時に起こつた原発事故が、この災害を未曾有のものとしました。千年、万年たつても自然に戻らない放射性物質が大量にばらまかれたのです。

原発は、トイレのないマンションのようなものです。いずれは排泄物によつて地球に住めなくなる。十万年たつても危険なままの廃棄物を作り続けることはもうやめなければなりません。

同時代性への認識

今年でちょうど三十回目となる記念すべき提言です。そのお題のなかに「生命の尊厳」の言葉があることは、非常に重い意味をもつていると私は考えています。現代という時代は、日蓮大聖人

「生命の尊厳」という視座に貫かれたSGI提言

国際日本文化研究センター教授

安田喜憲

yoshinori yasuda

やすだ・よしのり

1946年、三重県生まれ。72年、東北大学大学院理学研究科修士課程修了後、広島大学総合科学科助手をへて、94年から国際日本文化研究センター教授。専攻は地理学・環境考古学。環境考古学という新たな分野を、日本で最初に確立。主な著書に、『文明の環境史観』（中央公論新社）『生命文明の世紀へ』（第三文明社）『山は市場原理主義と闘っている』（東洋経済新報社）など多数。

共苦して心を震わせられるか



が生きられた時代との「同時代性」のなかで理解する必要があります。池田先生も提言で言及されていますが、大聖人が生きられた時代も天変地異が多く、民衆は塗炭の苦しみにあえいでいました。そのときに立ち上がったのが大聖人であり、ここが創価学会の原点でもあると思います。

救わなければならないのは誰か。それは、庶民です。大聖人が「立正安国論」のなかで、国という漢字を、くがまえに民と書いて表現されたように、国の根本は民衆だからです。民衆の苦しみに心を震わせ、少しでも分かち合いたいとの思いから生まれる励ましであつてこそ、民衆の心の奥に沈む「残り火」を守ることができるに違いありません。

民衆を守る、その根幹におくべき思想が「生命の尊厳」なのです。「生命の尊厳」を掲げられた今回の提言は、池田先生による「現代の立正安国論」にはかならないと私は思います。

弱者の立場から見える真実

ここで少しだけ個人的な話をさせていただきます。私の父は創価学会初代会長・牧口常三郎先生と同じく教育者でした。三十九歳で校長になり赴任した先が同和地区でした。学校にこないで働いている子どもたちのために教育に全力を注ぐことになりました。

しかし、父は四十九歳で亡くなりました。いまでいう過労死でした。そんな父が私への遺言としたのが、「喜憲、真実というものは弱いものの立場に立ったときに初めてわかる」という言葉でした。

弱いものの立場に立つ、そのことが、提言では「生命の尊厳」という言葉で表現されています。「一寸の虫にも五分の魂」があります。どんなに虐げられた人々であつても、それぞれの生命には尊厳がある。その尊厳こそゆずることのできない生きる力の源泉なのです。震災直後の被災地の様子は、海

外の人々に驚嘆と称賛をもつて受け止められました。

物を奪うこともなく、泣き叫んで取り乱すこともなくじつと哀しみを抱きしめて耐えている被災者たち。一枚のビスケットを五人で分け合うようなことをして、いたわり合つた。そこには美しい日本人の魂の残照が垣間見えました。ところが食事や水にも困っている被災者がたくさんいるときに、山のように積み上がった援助物資を前に、行政官たちは「どうやったら平等に配れるか」を議論していた。

みなさんが、少しでも助けになればと出した義援金は、一向に被災者の手には届かずに、同じく「どう公平に分配するか」の議論に時間が費やされていきました。

政治家はどうだつたでしょうか。民主党も自民党も権力闘争をするばかりで、挙国一致でこの困難にあたらうとする動きは出てこなかった。そして原発事故に対する対応の未熟さによつて、日本人に対する世界の人々の称賛は、落

胆へと変わりました。

そしていま、震災がれきの受け入れが、各地の住民の強硬な反対によつて進んでいないことをみると、もはや日本人は「相手の苦しみに心を震わせることができなくなつてしまったのではないのか」とさえ思われるのです。

「生命の尊厳」という視座の欠如がこうした醜態を生んでいるのではないのでしょうか。

いまこそ

「生命文明」の構築を

私は、これまで日本文明には三回の危機があつたと指摘しています。一回目は、明治維新のころです。西洋から物質・エネルギー文明が入り、江戸時代の日本の歴史と伝統文化は破壊されました。

二回目は、太平洋戦争の敗戦です。こんどはアメリカから流入した大量生産、大量消費の物質文明によつて、日本人が失つてはならない日本人の心と魂が失われました。今回の被災を特別なものにし

た原発はこの危機の際に入つてきたものです。

三回目が現代です。「第三の開国」という論者もいますが、金融資本主義、グローバル化は、日本人の魂の根幹にある「生命の尊厳」の息の根を止めようとしているかのようです。

貴誌のタイトル「第三文明」と私の「第三の危機の時代」はくしくも一致します。ともに生命の危機を基本にすえて提示された思想です。「日本は今こそ生命文明への転換を」と、私は長年訴えてきました。これは今回の提言で池田先生によつてあらためて提示された「生命の尊厳」と共鳴するものです。

貴誌も、新しき文明を目指して創刊されたと同つています。いままさに「第三文明」が求められている時代なのです。その「第三文明」とは「生命の尊厳」に立脚した「生命文明」の時代を構築することにほかならないということ、みなさんにも知ってほしいと願っています。(談)